

# VOICE NO.4



迫野 昌文

九州大学工学部応用物質化学科卒業後、九州大学大学院工学研究院化学システム工学専攻にて博士号取得。2004年基礎科学特別研究員として理研入所。前田バイオ工学研究室にて研究に勤しむ。その後、2006年から客員研究員。2010年には、ERATO伊藤グライコリロジープロジェクトに参画。2014年10月富山大学大学院理工学研究部 ナノ・新機能材料学域機能性分子創成変換システム学系、准教授に着任。

富山大学  
工学部環境応用化学科  
准教授【工学博士】

非常勤講師として味わった  
苦い経験が、  
今の自分の原点に

# Masafumi Sakono

転機 葛藤 前進 未来

## 仲間の存在が、 次へ進む原動力。

転職を考え始めたのは、伊藤グライコリロジープロジェクトに参加してから2年目のことでした。年齢を加味すると、最大5年の任期満了前には次を決め

ておかなければならないと意識していました。大学一本に絞って就職活動を開始しましたが、時間を空けずに応募書類を提出する日々を送りました。総計で20-30はあったと思います。面接にかかることもなく不採用通知だけが届き、その度に落ち込んだ気持ちになったことを覚えています。黙って側にいてくれる妻に対しても申し訳ない気持ちでした。それでも意欲を失わずコンスタントに頑張れたのは、研究所

の仲間の存在が大きかったです。皆が同じような境遇で、悩んでいたのです。「辛いのは自分だけじゃない」と前向きに思うことが、次への原動力になっていました。「就職は縁だ。人格やキャリアを否定された訳ではなく、互いの希望が合致しなかっただけ。諦めずにどんどん出せ」という先輩の言葉に励まされ、論文を書きつつ公募書類を書くことがルーティンとなっていました。

## 初めから順調だったわけじゃない。 他との差別化が、トビラを開くカギに。

ある時から、面接に招かれることが多くなりました。それは、応募書類の内容を意識的に変えたタイミングとびたりと重なっています。就職活動と時期を同じくして始めた、大学での非常勤講師の経験にきっかけがあると思います。初年度は学生からの評価がさっぱり良くなって、すぐ落ち込んだのを覚えています。彼らの視点に立ち返って「何に興味を持っているのか?」「どこが知りたいのか?」をポイントに、授業のテーマや進め方を考え直したところ、次年度の評価はかなり改善されました。相手が何に興味をもち、どこが知りたいのかということは、就職活動でも大事なのだと気づきました。これらを意識したところ、面接へ進む確率が高まりました。研究内容や業績一辺倒にせず、授業での工夫はもちろん、応募先の大学を研究し、これまでの私の取り組みがどう役立つかを丁寧に書き記しました。今思えば、これが就職活動のターニングポイントだったのだと思います。私個人の分析の域を超えませんが、「他の候補者との明確な差別化」と、「教育分野での実績」が、担当者の目に留まる内容へとブラッシュアップさせたのだと思っています。

でも、そもそも大学での非常勤講師のお話がなかったら、今の私はないと思います。大学の仕事を「研究室を持つ」という視点でしか見られていませんでしたから。

## 「みんなの研究」という、 新たな魅力。

大学の仕事は、授業・運営・卒業研究指導の3本柱。どうしても研究は、理研時代と違い、様々な業務の一つになるため、細かく目を配ることが難しくなります。意思疎通が取れず、学生より自分でやる方が早いと思うこともあります。大学の研究にはこれまでに感じたことのない魅力もあります。一つ目は授業の下準備が、意外な形で研究にフィードバックできること。そして二つ目は、学生と共同で研究すると、予想できないアイデアやアクセシビリティによってハブニング性の高い結果に出会えること。研究のフィールドが広がったという点からも、ポジティブにとらえています。しかも研究室を持つと、全ての方向性・テーマ・お金の使い方を一任されます。視点を変えれば、ネジひとつから自分好みにカスタマイズしても良いという訳です。何をどう買うか検討することから、すでに研究は始まっており、思慮をめぐらせて手に入れた全てに愛着があります。その一方で、地方大学は予算がなく、費用は自身の手でかき集めなければなりません。研究費が年度途中でショートする可能性もあります。また、ハイレベルな機材に触れさせてあげたくても、簡単には実現できないものかしざがあります。

だからこそ、理研のような研究インフラの整った場所があるのは、研究教育の上で非常に助かります。

## 学生と研究室の成長。 これからの未来が楽しみではない。

ようやく研究が軌道にのり、学生による学会・論文発表が実現しました。研究指導を通して彼らが成長していると思うと、大きな達成感があります。若者の成長をダイレクトに感じられることが教育の醍醐味だと思います。ここに至るまで教育に大きく関わっていませんでしたので、大学で指導することが不安だった時期もありました。最近は有り難いことに、研究室の入室希望者は着実にその数を増やしており、大学人としての一步を踏み出すことができたと感じています。今後の目標は、理研時代に取り組んでいない研究を富山大学でゼロから立ち上げ、世の中に発信していけるオリジナルな「売り」を作ること。学生の成長と研究室のこれからが本当に楽しみです。

最後に、今後大学へ就職を希望される方に伝えたいのは、「教育の場である」という本質を見据えてほしいということです。研究室を持つ、研究を拡大する、という点でのみ大学を捉えていると、大学の現場をわかっていないと判断されると思います。そのためには、「大学の現在」を知ること不可欠です。ですから、非常勤や集中講義などどんなカタチでも積極的に大学教育に関わっていただきたいと思っています。直接的な経験からしか、見えない事実は山ほどあります。理研で研究・成果発表している時点で、研究者としての評価はすでに高いと思います。自分ならではの教育への「+a」を期待されていると思います。



富山大学  
大学院理工学研究部教授  
工学部教授・副学部長 會澤 寛一さん

## ただ、業績があるだけでなく 教育者としてのこれからの可能性に期待

まず書類選考では研究内容の他に、論文数、資金獲得能力、特許出願数などを比較します。書類選考を通過しますと、次に面接によって研究能力だけでなく、人柄や教育に対する考え方をできるだけ評価します。迫野先生の面接では、研究の内容と今後の研究計画、教育に対する抱負を聞いた後、模擬授業をしてもらいました。正直なところ、すごく上手というほどではなかったと思います(笑)。優秀な候補者は他にもいましたが、迫野先生が最終的に選ばれた理由は、許容力のある人柄とできない学生に対する丁寧な教え方が予想できたからです。大学では学生に教育し、学生に研究させなければなりません。ある意味では学生が主役です。そして私の経験上、大学で活躍される方には、生身の人間を教育し多様な状況で研究を推進できる柔軟性が備わっています。迫野先生からはそれらの方々と同じにおいがありました。実際、着任して2年目には、学生が選ぶザ・ティーチャーにも選ばれています。学生たちとのコミュニケーションを重ねることによって得られた成果が現れ始めたのでしょう。これからの迫野先生の研究者・教育者としてのさらなる成長にとても期待しています。